

1. 教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画に関すること

本学の「共生とコミュニケーション」といった理念を礎に、子ども問題の専門家としての養成を図ろうとしたのが本学「子ども学部子ども学科」である。子ども学部子ども学科は、子どもと、それを取り巻く諸環境との関係を総合的に捉える視点に立脚し、その教育・研究を実践する目的で設立された。

個々の人々の精神、身体、行動の成長発展は、それらの人々を取り巻く家族、社会、文化、自然等の様々な環境との相互作用で成立するものと思料する。そして、近年の少子化、高齢化、IT社会への移行などの急激な社会的な変化は、今日の人々の生き方や価値観、行動様式に大きな影響を及ぼしてきており、これからの人間研究においては、精神発達、身体発達を探求する場合においても、人間と家族、人間と社会、といったヒューマンエコロジーからの研究が有効であると思われる。人間は社会の中で孤立して生きていくわけにはいかない存在、換言すれば共存共栄的な生き方を選択せざるを得ない宿命をもつ存在である。こうした人間の行動様式を「共生」と「コミュニケーション」という言葉をキーワードに、教育学、心理学、社会学、福祉学、生活科学、行動科学、健康科学など諸学の総合的な、あるいは学際的な活動によって俯瞰的に攻めていくことは、有効な手段であろう。

社会全体の中の一構成員としての自分というものを強く見極め、意識していかなくてはならない時代の到来を見据えて、子ども研究においても、「子どもたちが社会の中で連携し、協力し、コミュニケーションしながら、ともに生きていく」という理想を相互に具現化していくといった、新しい視点から子どもに関し総合的に教育研究を行なう組織として、本学に設置された子ども学部では、特に子ども研究を進める過程の中で、幼児期に着目してきた。そして、人間の成長の初期段階ともいえる幼児期の教育についての研究と実践を主たる目標の一環として、学部設置当初から、幼稚園教諭一種免許状と保育士資格について取得可能なカリキュラム編成を実施し、毎年多くの学生を幼児教育の現場に送り出している。変化の激しい社会の中で、子どもたちの気持ちに寄り添うことができる人材、子どもたちとその保護者の意識、行動の変容に適切に対応できる教員の養成が本学部の教員養成の目的である。

このように本学子ども学部子ども学科は、多様化し複雑化する現代の子どもに関わる諸問題を総合的に教育、研究することを目的とし、実証的で問題解決型の教育研究を展開し、幼児教育を中心に子どもの成長に貢献しうる専門職員の育成を目指してきたが、学齢期以上の学校教育の諸問題もまた、子どもの成長に密接に関連するものである。初等教育を担う教員の養成については、これまで国立大学法人を中心とする教育学部が、教科指導力を重視した教員養成で実績をあげているが、情報化社会の進展とともに、子どもの意識、行動は著しく変容しており、複雑化した子どもの諸問題に対処するには教科指導の力量に留まらず、多面的な資質、力量が必要とされる。現代の子どもを取り巻く環境について理解し、幼稚園、保育所との連携を深めながら子どもの発達、教育制度上の質的変換期をサポートする人材が小学校の教員集団に加わることも喫緊の課題である。

そこで本学部では、今日求められる教員の養成に資するため、開設以来、玉川大学通信教育部との連携により在学中の小学校教諭免許状取得の途も開いてきたが、更なる幼児教育と学校教育の連携に精通する人材の育成を目指して、本学部において小学校教諭一種免許状を取得できる課程を平成24年度から設置した。幼児、初等教育や子どもたちの発達支援の分野での高度な職業的専門性には、教育学、心理学、社会福祉等の子どもの発達に関わる基礎的な学識と、子どもの心に寄り添うことができる豊かな感性、表現能力等の広範な資質、力量が含まれる。本学部の設置当初から脈々と受け継がれてきている「共生」という理念はまさにこうした人材養成に合致するものであり、この理念に裏打ちされた本学部のカリキュラムにおいて育まれる専門性と教科指導力を重ねることにより、特徴ある初等教育を担う人材の養成を進め、本学部に課せられた社会的使命をさらに果たすことを目指している。そして、従来から注力している幼児教育の担い手の養成においても新たな専門的力量を加えることが期待される。